

報告タイトル

集合的記憶の形成における「他者性」:
佐渡島の金山における朝鮮半島出身労働者の記憶をめぐる
“Otherness” in the Formation of Collective Memory:
Memories of Korean Workers at the Sado Gold Mine

氏名(所属)

池上慶徳(国際基督教大学)
Keitoku Ikegami (International Christian University)

要旨(800字程度)

戦時中の朝鮮半島出身労働者をめぐる問題は、日韓の「歴史認識問題」の中でも中心的な争点の一つである。1990年代以降、日韓間の外交懸案として断続的に浮上し、2018年10月の韓国大法院による元徴用工訴訟判決は、日韓関係を大きく悪化させる契機となった。この争点は近年でも顕在化しており、2024年に世界遺産に登録された「佐渡島の金山」をめぐるでも、同地で行われた所謂「強制労働」の扱いが外交懸案となった。

しかし、この記憶は、両国内において想起と忘却を反復してきた。1990年代前半、日韓の市民運動を通じて記憶の掘り起こしが進み、多くの出身労働者を送り出した地域では大きく取り上げられた。他方、当時ナショナルな次元には広がり、地域的にも継承されないまま、2000年代以降は公的言説空間からほぼ姿を消していた。そして2020年代、世界遺産登録の過程で改めて可視化された。

なぜ世界遺産登録という日本の行動が、両国における国民的な想起の契機となり得たのか。それは、世界遺産登録が国内的には政治の正統性へ直結し、国際的にはソフトパワーとして機能する象徴資本を生むという二重性を備え、地域的な記憶を国家間の争点へと転位させる回路として作動したためである。しかし、この点のみでは、一つの歴史的事象にかかる記憶の通時的な変遷を捉えることができない。

本報告は、佐渡島の金山を事例に、Jan Assmannの文化的記憶論を想起と忘却の力学を説明する理論的基盤としつつ、通時的な記憶の位相と背後の力学を検討する。当該記憶が想起と忘却を反復してきた過程を言説分析を中心に検証し、従来の集合的記憶にかかる理解を関係論的な方向へ発展させる。すなわち、国民的な集合的記憶とは国民国家内部の力学のみで完結するものではなく、対峙する集団の集合的記憶や行動も外部的な変数として取り込みながら、構築され直す過程であることを示す。